大学生のコミュニティ意識と形成要因

宮地　孝宜
（日本女子大学）

【要旨】
本研究は、コミュニティ意識、特に、地域社会への積極性や協同志向性がどのように形成されるのか、その要因を探るため、「地域社会への態度尺度」を用い、小学校教員免許状の取得を希望している学生を対象とし、質問紙調査を実施した。調査では、地域社会への態度のうち、「積極性－消極性」が有意に高い経験として、授業では「地域教材の利用」、授業外では「地域活動・地域行事への参加」、「協同志向性－個別志向性」が有意に高い経験として、授業では「地域教材の利用（小学校）」、授業外では「高校までの地域活動・地域行事への参加」等があげられた。

1. 問題の所在

現在、地域社会における人と人とのつながり、地域の絆など、地域社会のあり様が注目され、地域社会の再構築が求められている[1)]。

学校教育においても、小学校学習指導要領（第2章内容、第2節社会）が、第3･4学年の目標として「地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする」と示しているように、「地域社会の一員としての自覚」を持つことは、我々国民に求められる態度であり、子どもから成人へと成長する過程で身に付けるべきものである。このことは、生涯学習における学習課題、言い換えれば、社会の要請による学習課題の1つと位置付けられよう。そのためには、学校教育だけではなく、地域社会の様々な場所での学習が必要であり、家庭や地域住民等、あらゆる関係者の役割分担と連携が求められよう。

周知のとおり、1998（平成10）年告示の学習指導要領において、総合的な学習の時間が設置されるなど、学校での学習活動は多様化し、学校支援ボランティア等、地域社会との連携がこれまで以上に行なわれるようになった。こうした地域住民との交流等、子どもたちが地域社会と関わった経験はどのような効果を生み出しているのだろうか。例えば、文部科学省が実施している「全国学力・学習状況調査」では、「地域行事への参加」と学力調査の正答率の間に正の相関があることが分かっている。であるならば、「地域行事への参加」などの地域社会における経験が「地域社会の一員として自覚」を持つなどの地域社会に対する子どもたちの考え方、言い換えれば「コミュニティ意識[2)]」に対してもプラスの影響を与えていると考えられるのではないだろうか。

なお、コミュニティ意識に関しては、概ね1960年代後半以降、様々な研究者らによって尺度が開発され、多くの調査が行われてきた。それら一連の調査・研究を見渡すと、地域社会の形態、居住年数や年齢・性別、学歴等とコミュニティ意識を比較した研究は散見さ

れるが、子ども期の学校や地域における経験と現在のコミュニティ意識とを比較している調査は見当たらない[3)]。

2. 研究の目的・方法

以上のことから、本研究は、初等・中等教育を既に終了した大学生を対象とし、コミュニティ意識が形成される要因について、地域社会における経験との関係を探ることを目的とし、調査を実施することとした。

初等・中等教育段階における、地域社会での豊かな経験が、大学生のコミュニティ意識にプラスの影響をもたらしているのではないか、また、どのような経験がプラスに作用しているのか、これらの点について検討していきたい。

コミュニティ意識の測定にあたっては、「地域社会への態度尺度」[4)] をもとに、調査票を作成した。なお、尺度の各項目については、現役大学生が考えやすい文言に若干の修正を施した（調査票の作成過程においては、複数の大学教員に意見を求めた）。

同尺度は、成人一般を対象として住民のコミュニティ意識を測定する尺度で、「積極性－消極性志向（地域社会におこる諸問題に対して、成員として積極的に取り組み行動し参加する姿勢を持つかどうか）」と「協同志向性－個別志向性（地域社会の成員としての自覚に基づき、地域社会という全体的な集合の場を重視するか否か）」の２つの下位尺度によって構成されている。同尺度については、少ない因子でコミュニティを説明しようとするなどの問題点も指摘されているが、「国内における社会心理学的研究としては、他の尺度や具体的場面との関連性も検討された唯一といってよい尺度[5)]」と一定の評価を得ており、これまで、多くの研究者によって、コミュニティ意識を測定する尺度として利用されている[6)]。

本調査では、コミュニティ意識の形成要因を探るため、小・中・高等学校における学習経験、これまでの生活環境や経験等を変数として設定した。特に、学校教育における学習経験として、地域社会との関連が非常に深い教科の１つである社会科での学習、社会科における利用の可能性を探る観点から博物館に焦点を当て、調査項目を作成した。

3. 調査結果と考察

(1) 調査の概要

調査の概要は以下のとおりである。

①調査対象者：Ｎ大学、教職科目「社会科概論」「社会科教材研究」受講者（出席者全員）

②調査日：第１回　2010年10月11日、第２回2011年７月５日

③調査方法：質問紙調査

④回収率：第１回　100%（回収数94／配付数94）

　　第２回　100%（回収数70／配付数70）

⑤学年等：

	2年次	3年次	4年次	不明	計
第1回	89	3	1	1	94
第2回	51	3	0	16	70
計	140	6	1	17	164

⑥各態度の合計点の平均

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
積極性－消極性	161	7	25	15.96	3.381
協同志向性－個別志向性	162	5	25	16.10	3.306

(2)小・中・高等学校における社会科（地歴・公民）の授業について

まず、小・中・高等学校における社会科（地歴・公民）の授業において、地域の博物館の利用、博物館以外の施設の利用、地域教材の利用（ゲストスピーカーなど地域の人材活用含）の3点と、地域社会への態度との関連についてみていきたい。

1)地域の博物館の利用（学芸員等の来校も含む）（表1～3）

小・中・高等学校とも全ての項目において、地域の博物館の利用経験が多いほど、高得点をしめしている。全体的にみて、社会科における地域の博物館の利用は、地域社会への態度にプラスの影響を与えているといえよう。また、小・中学校の積極性－消極性尺度、高等学校の協同志向性－個別志向性尺度において、有意な差を示している。特に、小学校の積極性－消極性尺度は、平均の差も大きいことが注目に値する。低学年・学校段階から、積極的に博物館を活用することが、大学生の積極性へとつながっている。

表1　地域の博物館の利用（学芸員等の来校も含む）：小学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	62	14.65	3.020
p<.01	よく利用、ときどき利用していた	99	16.78	3.349
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	62	15.61	3.795
	よく利用、ときどき利用していた	100	16.41	2.941

表2　地域の博物館の利用（学芸員等の来校も含む）：中学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	119	15.65	3.196
p<.05	よく利用、ときどき利用していた	42	16.83	3.761
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	118	15.85	3.241
	よく利用、ときどき利用していた	44	16.80	3.414

表3　地域の博物館の利用（学芸員等の来校も含む）：高等学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	138	15.95	3.274
	よく利用、ときどき利用していた	21	16.05	3.993
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	138	15.90	3.252
p<.05	よく利用、ときどき利用していた	22	17.77	3.146

2)地域の博物館以外の施設の利用（表 4～6）

社会科における地域の博物館以外の施設の利用経験との関連についてみると、概ね利用経験が多いほど、各尺度の得点が高いが、特に、小学校の積極性－消極性尺度の得点が有意に高いことが見て取れる。このことは、上記 1)と同様の傾向といえよう。

表 4　地域の博物館以外の施設の利用：小学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	48	15.08	3.407
p<.05	よく利用、ときどき利用していた	113	16.33	3.315
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	47	15.66	3.472
	よく利用、ときどき利用していた	115	16.29	3.233

表 5　地域の博物館以外の施設の利用：中学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	93	15.65	3.168
	よく利用、ときどき利用していた	62	16.52	3.643
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	95	15.78	3.349
	よく利用、ときどき利用していた	62	16.65	3.280

表 6　地域の博物館以外の施設の利用：高等学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	119	16.05	3.170
	よく利用、ときどき利用していた	35	15.94	4.022
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	120	16.02	3.341
	よく利用、ときどき利用していた	36	16.61	3.271

3)地域教材の利用（ゲストスピーカーなど地域の人材活用含）（表 7～9）

地域教材の利用（ゲストスピーカーなど地域の人材活用含）との関連についても、すべての項目において、利用経験が多いほど高得点を示している。特に、小学校においては、両尺度とも、中学校においては、積極性－消極性尺度が、有意に高得点を示している。小学校が顕著な傾向を示しているのは、低年齢期から地域住民等との関わりを経験したことにより、より身近に地域社会を捉え、より、肯定的な地域社会への態度の形成につながったのではないかと推測される。

表 7　地域教材の利用（ゲストスピーカーなど地域の人材活用含）：小学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	44	14.61	3.452
p<.01	よく利用、ときどき利用していた	116	16.45	3.237
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	44	15.23	3.147
p<.05	よく利用、ときどき利用していた	117	16.44	3.331

表 8　地域教材の利用（ゲストスピーカーなど地域の人材活用含）：中学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	89	15.43	3.162
p<.05	よく利用、ときどき利用していた	71	16.59	3.568
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	88	15.74	3.186
	よく利用、ときどき利用していた	73	16.55	3.436

表 9　地域教材の利用（ゲストスピーカーなど地域の人材活用含）：高等学校

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	127	15.87	3.313
	よく利用、ときどき利用していた	32	16.31	3.737
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	128	16.08	3.259
	よく利用、ときどき利用していた	32	16.34	3.552

(3)地域社会における経験との関連について

次に、学校教育以外の地域社会における経験として、居住地域の規模、地域活動・地域行事への参加経験、地域の博物館の利用（学校での利用以外）、地域の博物館以外の施設の利用（学校での利用以外）、現在の居住形態の 5 つの項目と各尺度との関連についてみていきたい。

1)居住地域の規模（表 10～11）

居住地域の規模については、自治体の人口規模が小さいほど、各尺度の得点が高いが、特に、高校までに居住していた自治体の人口規模小の協同性志向－個別性志向の得点が有意に高い。決して、一概に言えるものではないが、一般に規模の小さい市町村は、住民同士のつながりがあり、地域社会における共同性が発揮されているとも推察される。そうした地域社会での生活そのものが、協同性志向を高めているのではないだろうか（有意な差は無いが積極性志向の得点も高い）。

表 10　居住地域の規模：高校まで

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	市（人口 5 万人以上）・政令市	111	15.89	3.220
	町村・市（人口 5 万人未満）	49	16.14	3.769
協同－個別	市（人口 5 万人以上）・政令市	111	15.77	3.244
p<.05	町村・市（人口 5 万人未満）	49	16.94	3.344

表 11　居住地域の規模：高校卒業後から現在まで

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	市（人口 5 万人以上）・政令市	129	15.99	3.337
	町村・市（人口 5 万人未満）	30	15.70	3.583
協同－個別	市（人口 5 万人以上）・政令市	128	15.93	3.437
	町村・市（人口 5 万人未満）	31	16.90	2.688

2)地域活動・地域行事への参加経験（表 12～13）

地域活動・地域行事への参加経験との関連についてみると、地域活動等への参加経験が多い方が尺度の得点が高いが、特に、高校までの積極性－消極性尺度は有意に高く、協同性志向－個別性志向尺度、および、高校卒業から現在までの積極性－消極性尺度の得点が有意に高い傾向を示している。高校までの間に、地域活動や地域行事へ参加の機会を増やすことが、地域社会への態度をより肯定的にすることにつながるということが見て取れよう。

表 12　地域活動・地域行事への参加経験：高校まで

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり参加、参加しなかった	47	14.43	3.215
p<.01	よく参加、ときどき参加	114	16.59	3.256
協同－個別	あまり参加、参加しなかった	48	15.42	3.631
p<.1	よく参加、ときどき参加	114	16.39	3.130

表 13　地域活動・地域行事への参加経験：高校卒業後から現在まで

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり参加、参加しなかった	142	15.80	3.361
p<.1	よく参加、ときどき参加	18	17.22	3.457
協同－個別	あまり参加、参加しなかった	144	16.01	3.218
	よく参加、ときどき参加	18	16.89	3.954

3)地域の博物館の利用（学校での利用以外）（表 14～15）

地域の博物館の利用（学校での利用以外）についても、全体として、利用経験が多いほど高得点を示している。特に、高校までの利用経験が多い群の積極性－消極性尺度の得点が有意に高い。学校教育での利用と同様の傾向を示していると言えよう。

表 14　地域の博物館の利用（学校での利用以外）：高校まで

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	111	15.50	3.222
p<.05	よく利用、ときどき利用していた	48	16.94	3.599
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	111	15.91	3.212
	よく利用、ときどき利用していた	49	16.47	3.548

表 15　地域の博物館の利用（学校での利用以外）：高校卒業後から現在まで

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	136	15.79	3.347
	よく利用、ときどき利用していた	23	16.78	3.618
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	136	16.07	3.237
	よく利用、ときどき利用していた	24	16.17	3.818

4) 地域の博物館以外の施設の利用（学校での利用以外）（表 16～17）

地域の博物館以外の施設の利用（学校での利用以外）については、統計上の有意な差は認められないものの、概ね、利用経験が多い群が高得点を示している。

表 16　地域の博物館以外の施設の利用（学校での利用以外）：高校まで

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	71	15.82	3.510
	よく利用、ときどき利用していた	90	16.07	3.290
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	72	16.29	2.967
	よく利用、ときどき利用していた	90	15.96	3.563

表 17　地域の博物館以外の施設の利用（学校での利用以外）：高校卒業後から現在まで

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	あまり利用しなかった、利用しなかった	107	15.79	3.420
	よく利用、ときどき利用していた	53	16.26	3.329
協同－個別	あまり利用しなかった、利用しなかった	107	15.97	3.335
	よく利用、ときどき利用していた	53	16.45	3.267

5)現在の居住形態（表 18）

現在の居住形態については、統計上の有意差は認められないが、家族と同居している方がともに高得点を示している。情報が不十分で推測ではあるが、家族と同居しているということは、生まれ育った町に住み続けている可能性が高く、日常的な家族と関わり合い、家族を通した地域社会との関わり合いなどが影響していることも否定できないだろう。

表 18　現在の居住形態

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	家族と同居	46	16.20	3.679
	その他	108	15.83	3.294
協同－個別	家族と同居	47	16.15	3.689
	その他	109	15.97	3.184

(4) 博物館等の地域の施設や地域住民等との連携に関する意向（表 19）

調査の最終項目として、「将来、教員になったら、博物館等の地域の施設や地域住民等との連携を積極的に行いたいと思うか」聞いた。地域社会との連携を肯定的に志向する学生は、地域社会に対し、より積極的、協同志向的な態度をすでに形成していることが示された。

このことからも、地域社会への積極性や協同志向性は、学校と地域社会の連携が求められる今日において、その担い手となる教員に必要な態度ともいえるのではないだろうか。

表 19　博物館等の地域の施設や地域住民等との連携に関する意向

		N	平均値	標準偏差
積極－消極	そうは思わない・どちらかといえばそうは思わない・どちらともいえない	18	12.39	3.550
p<.01	そう思う　・どちらかといえばそう思う	143	16.41	3.091
協同－個別	そうは思わない・どちらかといえばそうは思わない・どちらともいえない	18	13.28	3.268
p<.01	そう思う　・どちらかといえばそう思う	144	16.46	3.146

4. まとめと課題

これまでの調査結果をまとめると、概ね、地域社会における様々な経験が多いほど、地域社会に対する積極性、協同志向性の得点が高いが、特に、以下の経験がそれぞれの尺度において、有意に得点が高いことが分かった。

(1)「積極性－消極性尺度」の得点が有意に高い経験

【授業で】

・地域の博物館の利用（学芸員の来校含む）：小学校、中学校
・授業で地域の博物館以外の施設の利用：小学校
・地域教材の利用（ゲストスピーカーなど地域の人材活用含）：小学校、中学校

【授業外で】

・高校までの地域活動・地域行事への参加
・高校卒業から現在までの地域活動・地域行事への参加
・高校までの地域の博物館の利用（学校以外での利用）

(2)「協同志向－個別志向尺度」の得点が有意に高い経験

【授業で】

・地域の博物館の利用（学芸員の来校含む）：高等学校
・地域教材の利用（ゲストスピーカーなど地域の人材活用含）：小学校

【授業外で】

・高校までの居住地域が町村・人口 5 万人未満の市
・高校までの地域活動・地域行事への参加

地域社会の一員として、地域社会に対する積極的かつ、協同志向的な態度を形成するには、子どもの頃からの学校内外における地域に関わった体験を充実させることが鍵となるといえよう。そのためには、学校教育、社会教育のこれまで以上の連携を推し進めることが重要である。

最後に、本研究の課題を述べておきたい。本研究は、学生が自身の過去を思い返す、いわゆる回想法により、これまでの経験を抽出しており、実際の経験と異なる回答がされていることも想定される。この点は、分析結果の信頼性に多少の影響がある可能性があり、研究方法の課題といえよう。今後、本調査によって各尺度の得点が高かった学生へのヒアリング調査を実施するなど、質的なアプローチをし不十分な点について補強したいと考えている。

なお、各人がこれまでの学習を客観的に把握できるポートフォリオの様なものを普及させることにより、個人の生涯学習の道標、学習成果の活用促進となるだけでなく、こうした研究にも役立つことになると考えられる。全国で通用するフォーマットの開発、普及が望まれるだろう。

最後に、本調査が意図していなかった、調査の実施自体による効果について述べたい。調査を回答した学生の授業後のリアクションペーパーを見ると、自分がいかに地域社会と関わっていないかということを実感し、今後、積極的に関わっていきたい、関心を持つようにしたいという記述が散見された。自分と地域社会との関わりを再確認するツールとなっていたようである。本調査の教育的な成果と言えるだろう。

付記：アンケートに協力いただいた学生の皆さんに感謝の意を表したい。

【注記・引用文献】

1) 国の中心政策の１つとして数えられるものであると同時に、日本生涯教育学会においても、2011 年の生涯学習政策研究フォーラムにおいて、「生涯学習推進に対する社会の要請にいかに応えるかーコミュニティの再定義と個人の自立ー」として、これからの地域社会（地域コミュニティ）の在り方等に関して活発な議論が展開されるなど、研究対象としても注目されている。

2) 社会学では「特定のコミュニティへの帰属・一体感情」等と説明されている（奥田道大「コミュニティ意識」新社会学辞典 1993 有斐閣 pp. 478-479)。

3) 例えば、倉沢進「来住市民と市民意識ー小金井における調査から」『行政管理』1967 では、市民意識尺度と移動性・定着性、居住歴、団地居住、学歴、年齢、職業等との関係性を明らかにしている。近年では、コミュニティ意識尺度の再構成を試みた石盛真徳の一連の研究がある。性別、年齢、学歴等の属性、居住環境、コミュニティ意識が地域へ

の参加状況、近隣づきあいにどのように影響しているかを検討し、優れた成果を残している（石盛真徳『コミュニティ意識と地域情報化の社会心理学』ナカニシヤ出版　2010 などを参照）。しかし、小・中・高等学校における学習経験、言い換えれば、学校教育における教育活動や、これまでの生活環境、地域における経験等を変数として設定した研究は管見の限り、無いようである。なお、コミュニティ心理学研究においても「ある特定時点におけるコミュニティ感覚と他変数との関連を記述する横断的研究がほとんど」と指摘されている（笹尾敏明「コミュニティ感覚」植村勝彦・高畠克子ほか編『よくわかるコミュニティ心理学』ミネルヴァ書房 2006 p. 61）。

4) 詳しくは、田中國夫・藤本忠明・植村勝彦「地域社会への態度の類型化について―その尺度構成と背景要因―」『心理学研究 49』1978　pp. 36-43、藤本忠明　「コミュニティ意識の研究」山本和郎編『コミュニティ心理学の実際』新曜社　1984　pp. 265-274 などを参照いただきたい。
なお、具体的な尺度項目は以下のとおりである。

［積極性－消極性態度］
・町内会（自治会）での発言は、あとでいろいろ言われやすいので、なるべく発言したくない。
・この町をよくするための活動は、地元の熱心な人たちに任せておけばよい。
・学校の整備や遊び場の確保などについては、行政のほうでうまくやってくれるだろうと信頼している。
・自分の住んでいる地域で、公害反対運動（市民運動）がおきてもそれに関わりたくない。
・近所の顔見知りの人とは親しくしたいが、知らない人とはそれほど親しくなりたいとは思わない。
［協同志向性－個別志向性態度］
・町内会（自治会）の世話をしてくれと頼まれたら、引き受けてもよいと思う。
・地域の生活環境をよくするための公共施設の建設計画がある場合、自分の所有地や建物の供出にはできるだけ協力したい。
・自分の近所に一人暮らしの高齢者がいたら、その高齢者のために日常生活の世話をしてあげたい。
・地域の皆と何かをすることで、自分の生活の豊かさを求めたい。
・いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている。

5) 石盛真徳『コミュニティ意識と地域情報化の社会心理学』ナカニシヤ出版　2010　p. 17

6) 例えば、関根 薫「住民のコミュニティ意識と属性・意識変数との関係」『皇學館大学　社会福祉学部紀要』2005　pp. 159-166 など。